

西鶴の用字法覺書

杉 本 つ と む

私達が西鶴の作品を読んで行く時その用字（主に漢字）の點にも多くの興味を感じる。一つには、視覚にうつたえるその機能であり、次には、讀みと意味とを同時に讀者に換起するといふ効用である。新古今和歌集の象徴性や、短詩型としての俳句の生命のささえの一つはともに、名詞—漢語としてある—に依る。いわゆる文選讀といわれるものも漢語の二面性を巧みに利用した一種の下級の教育法（社會的でなく智的な面）でもあつたらう。

文學は言語を素材として驅使する藝術であり、常に言語との對決によつて新しい方面を開いて來たし、方向づけて來たと思ふ。

「源氏物語」「もろもろの和歌集」など多くがそうである。西鶴も又、かかる一人であると考えてよからう。誇張的にいえば、苦節二十年の言語訓練を経た後に出來あがつたのが「處女作品」の「好色一代男」であつたともいえよう。もち論西鶴が、意識的にどれ程、國語への對決をなし創造の道を行んだかは明確にはいえない。彼も又當時一般の俳諧師と同じ程度において國語に關心を持った事であらう。しかし反面において「石草」による彼の熱情の叫びは過少に評價されてよいものではあるまい。假名遣の亂

れ。あきらかに誤つてゐる漢字。句讀點の亂用。などなどいろいろ非難すべき點もあらう。「或」「有」「ある」の不統一さ。「不思議」が數丁後で「不思議」とあり「……など」副助詞が「謎」（これは「など」の訛として「なぞ」をあらわしているのであらう）とあるなどひど過ぎるといつてもよからう。當時の文化、社會の低級性にもよるだらうし、西鶴や、俳諧者達を含めて當時智識人の教養をもの語るものであらう。いわゆる歴史的假名遣も國學者という特殊グループのものにしか過ぎず、辭書編纂者自身からして後期ではあるが「余は假名遣について何らその法則を知らない。誤りあれば切に教示をねがう」（『蘭例節用集』の序）などと言つてゐる。更に町人階級のように繰起をかついだり言語のタブラに動かされてゐる人々の間では殊に漢字使用の意味が考えられるのである。今でも商人や職人の間では贈答に「〇〇〇さん江〇〇興利」とか「御手富貴」（布巾のこと）とか書いてゐる。まして、江戸時代の事を考えて見よ、かかる用法は既述のように「漢字」のもつ宿命的な二面性である。以下述べる事は、かかる西鶴の用字の一端を氣付いた儘に記述したものである。まず一部

の方で當時一般的な漢字の訓讀、字體をスケッチ風に記述し、二部の方で「西鶴研究(第六集)」の、森鏡三先生の論考を批判しておいた。彼、西鶴の用字法に多くの興味點が見出せるとは言え、その用法をもつて作品の眞偽を早急に斷定するのは餘りにも速斷すぎると思う。以下順次、記述して行く中に判明すると思うが、彼は決して特殊ではないのであつて他の場合と同様傳統の中に生きている人間なのである。

第一部

次に、五十音圖に配列した、漢字の字體と訓讀は「易林本節用集」(日本古典全集「正宗教夫編輯校訂」)による。他に二三參考にした辭書もあるがそれらは行間に註記しておいた。

*なお、摘出した語彙は、いづれも「西鶴の用語」で、「易林本」と一致するものである。辭書では、ルビが片假名であるが今は西鶴の方にしたがつて、平假名とした。必要に應じて註を附した。

天窓 數多 浮雲 丸雪 偷閑 嘲哢 萌新 有増 或

△數多(「贅頭節用集」以下△印で區別する)×雪路(「合類節用集」以下×印で區別する)○賤(「倭玉篇」以下○印で區別する)

遠磯 早晚 野見 隔 △時勢 △日外

虚 浦山敷 假寐(「△」は「假寐」)○鷗(「易林本」「黃鸝」)
棄(「玉篇大全」)「○」は「棄」×可恰 ×嚴
綴邊 衣裏 ×悅喜

【え】 【う】 【い】 【あ】 【お】 【か】 【き】 【く】 【け】 【こ】 【さ】 【し】 【す】 【そ】 【た】 【ち】

假粧 痲癩 怪我 諸難
比 胃元 點(「一代男」の「點」は誤字であろう) 以來
隔子(「易林本」には「筋隔子」とある)
私言 呬 羽觸 噪 作病 瀑布 △流石(西鶴にある)「石流」はみえない。「易林本」は「有繫」とある他日を期す。
※論末の註(6)を見よ。
尻 尻 如在 似指 仔細 滴 ×子細 ×自墮落 沉(但し「易林本」その他は「沈」△淨瑠璃
裾 雀小弓 小鮫魚 水精(「水晶」とも) 進疾
訕 忿々しく(「玉篇大全」)
繞せて 邂逅 扣 嬋娟 田垂 松炬 檀那 △遠 ○店
禿 連ひ 小 ×少

白粉 越度 音信 怪 可咲 瘡 髮 △御座 臆(ただし「臆」とある)
鑰 鑰 形見 鏡 形(ほかに「狀」もある) 堪忍 協ふ
△數(「○」は「救ナツル」枚ナツル)とある。鉈(正しくは「易林本」には「鉈」とある)
桐・梧 向後 花車(「易林本」は外に「花車・香茶」ともある)「△」は「香茶」 奇麗 稠 給分
屑 ×花麗 香 口説 群集 ×草臥(「易林本」は「勞倦」)
假粧 痲癩 怪我 諸難

【ふ】〔ひ〕

無臺 ばくたふ
 白粉 しろこな
 蛋 だん
 × 働 たらふく
 × 時花 ときはな
 △ 追 追ふ
 「邊」の當時一般通

用の異體字。
 儻 じやう
 竊 せう
 日來 じらい
 緹 たい
 美 び
 數 ず
 天驚絨 てんきやうじやう
 × 右行 ぎやう
 × 左行 ざぎやう
 蒲團 ぼだん
 不圖 ふと

風義 ふうぎ
 蓋 さい
 蓋 さい
 不思議 ふしぎ
 不思議「不思議ともある」
 蒲團 ぼだん
 不圖 ふと
 △

以上ごく簡単な羅列にすぎないけれども「西鶴作品」に見える用字も又當時一般のものであるという平凡な結論に達する様に思われる。猶ここで一言しておけば、いわゆる「遊仙窟」の用語が

[83]

「好色一代女」などのそれと關係あるようにいわれており（ことに「慶安版」事實用語について多くの照應が見出されるが「遊仙窟」が、文學に及ぼした影響と同様その用語についても古くからいろいろ知識人に關心がもたれたようである。したがつて室町時代と江戸時代に於た辭書類にもそれら用語の訓讀が必ずのつてゐるのである。ここで援用した「節用集」はことばから文字（漢字）を求める爲の辭書としては最も便利な通俗字書であつた。「易林本節用集」については同古典全集の橋本進吉博士の解説を参照されたい。私がこれを用いた理由の一つは「易林本」が當時かなりよく行われ且その後刊行の多くの「節用集」の根源となり、直接間接に江戸時代の言語文字の上に影響を及ぼしたと思われるからである。只この易林本に見えない語のいくつかが他の性格の異なる辭書に見えることは一應西鶴の座右の辭書を考ふる暗示ともなるであらう。又、上で述べたように「文字を求める爲」の辭書ではあるが、或用語に註記してある解説（釋義）も又、十分利用されて然るべきものである。「下學集」の「野馬臺」の説明なども三分の二頁程をついやしているし（「岩波文庫本」による）「難面」或ハ作「強面」日本世話不三退屈（義也）など語彙の意味研究上大切な意義をもつ。又「違字日本作」違非也」などは異體字の説明であらう。又「易林本」で見られずに「贅頭節用集諺解」で見られる語彙に自から時代の推移と言語の變化がわかる。「如鸞」が後者にあつてとくに「難字々盡」として説明されていて同時代的のものではないかと思わせる。又同じく「贅頭節用集諺解」に「浪人」について次のようにおもしろい説明がある。（西鶴の作品を

考ふる上の參考ともなうと思つので引用しておく）「浪人。牢人。浪人は流浪して零落たる人を云也。牢人は身に字失を得て官祿に離れたる人を云なり。身軽く走廻りて仕官をかせくを浪人と書。身重く引籠居て人に招るる藝術或は系圖を以て任官を願を牢人と書共いへり」とある。これで考えたと「浪人」は一般的な流浪の人の意が強く「牢人・牢人（狹義の浪人）が武士という特別な人間についての表現用語となつてゐる。「牢人」が一番上當のようである。（武道傳來記で女が流浪の身になつたのを「牢人」とあらわしている。再考を要しよう）又引用の「倭玉篇」などを見ると一字で實に多數のよみ方があることに一驚しよう。例えば「桃」ニヲム、カヘリミル、ヤム、目メ、マナコ、シルス、なんと八九通りの讀みがあることになる。西鶴などでかなり個性的と思われる讀みも一がいに「彼のー」と斷定できない事となる。更に「吊（用）」「太鞍（鞍）」「鞍カワ」として「倭玉篇」にあるが「土圭時計」など他の本には見えて辭書などで明確にし得ない語——かかるものにこそ西鶴の用字研究の大切な面がある——を廣く近世の語彙研究の一環として一層前進させて行くべきであらう。又辭書を用いる時にはその系統についても十分注意を拂わねばならぬと思われる。「合類節用集」など案外西鶴には用いられていないのではないか、彼はやや古いもの（或は程度の高いもの）を使用していたのではあるまいか。

扱つて一般的な見方からして西鶴の用字が決して特別なものではないということが結論できるならば次に西鶴の全作品を通じてど

のような用字の分布があるかその状態を考察する必要がある。即ち「好色一代男」では一貫して「不思議。或」と正字であり又「せんぎ」のように「食義」「一代男」「織留」「食儀」「男色。難波。食義」「新可笑記」食義「二代男」詮義「織留」諷議「胸算用」穿儀「武道傳來記」食義「男色大鑑」……これが、正字と思われる。もつとも「下學集」などでも行間の説明語で「食義、子細、吊(弔)」など使っている。などと、甚だバブライティ——に富んでいる状態も見られる。併しこの様な漢字の用法にも後期(今は「人情本」)は異なっている。一例を上げれば「死去」^{しなぐ}畢表^{しなぐ}内綴^{しなぐ}那^{しなぐ}美^{しなぐ}嬌^{しなぐ}情^{しなぐ}合^{しなぐ}(以上二代爲永春水「千代の礎」より)などいゆる單なる宛字的な性格が強い。人情本ではやはり下級の人々への考慮のあらわれでもあらうし、そこに人情本の性格がうかがわれよう。こう考えて見ても西鶴など相當高等のよみ物であつたと思われる。(正徳以前で近畿の寺子屋敷二十二。天明・享和で七十五)金と暇のある大輩・教養ある新興上層町人階級——のものであつたろう。さて些か一般的なあり方をスケッチした私は次に第二部として森純三先生の論考(「西鶴研究(第六集)」)について私見を述べてみよう。獨、西鶴作品の用字について調べる中「中世説話集」にその源泉を求めるべきを痛感した。(註)に、ほんの一例をあげたが「和訓」「字體」とともに、その研究對象にとんでいる。一言いいそえておく。

第二部 用字に關する森先生の論文私見

上で述べたように西鶴の用字が決して特殊なものではなく十分

近世初期における表現可能(使用可能)の領域においてのみ行なわれているらしいこと(ごくあたりまえの事にすぎないが)を考えてみれば、同先生の勞作も、西鶴個人の特異性を強調するよりも、むしろ、西鶴の作品が、いろいろな人の筆耕によつて板行された事情をかたる證左となるのみであらう。更には近世初期の出版物物語文章の略體文字、異體文字、漢字の訓讀についての研究資料になる點であらう。もつとも私は言語が社會的事實であるという面をのみ取上げて、それが一定個人に使用された時の價值を無視するものではない。併し「泪、涙」と混用されたり「貝、顔」と混用されていることを何も一源的に「泪」とか「貝」とかに片附けて自から動きのとれないものにする必要もないと思うのである。その混用の型それ自身を彼の作品の用法の一端と考えては何故いけないのであらうか。そうする事によつて彼にふさわしくない作品までも、彼のものと言つてしまわなければならない——不幸な事實が訪れるというのだろうか。しかし事實は事實であつて致し方あるまいと思う。もつとも「蠶」を誤字と輕くきめつけてしまつて「西鶴の作品」であるとしてしまふのもいけないと思う。(これはやはり上でのべたように大きな方法論上(手續)の誤證があるからである)或は又「葉」「玉篇大全」「葉」「倭玉篇」とある時は西鶴の作品の「葉」を想像とか可能の域でなく實際の論證根據の域まで縮めるべきであらう。西鶴がいろいろな用字用語を使用していることはその事によつて彼の作品が汚されるというより、むしろ彼の視野の廣さ、作品の變化性、更に上で述べた、書寫した人の多少こそ鮮明にされるようになるのではあるまい

が。私はそう信じている。以下森先生の實例を批判しつつ一層この考えを徹底していつてみたい。私達の私意で斷定を下す前に一にも二にも當時の資料（辭書）によつて同時代的意識（用法）の中に明確に浮上らせるべきであらう。森先生の論文（以下單に、「論文」と稱する）を読んで、まず疑問に思ふ事は（一）西鶴の眞正作品は「一代男」を以てすべきである。（同論一六四頁）——という斷定の意味である。もしこの意味が「すべての點において」と言うならば、何をかいわんやである。誰でもがしつていゝように（そう確定されているように）板下が西吟であつて西鶴ではない。——とすると何をもちつて眞正といえるのだろうか。次にどうして自筆板下を基に使用しないのであらうか。原本に近く複元するのには、その様なものを使用するのが、方法として望まれる手續きではなからうか。とすると「論文」は、出發點からして大きなミス—上でも述べたように、内と外の混同から來ている——をおかしてはいしまいか。更にその様なもつて提示された「論文」中の實例についてである。以下私の調べたものを考慮しつつ示すが、私は「中央公論社版」と「古典文庫」本によつたのであるが、同氏の見た（取扱つた）本と大分違つたものようである。今、ほんの一例をあげて批判の出發としよう。「西鶴模倣作品」を論じられているところ（一七二頁）でこう述べておられる。『好色盛衰記。——（前略）珍しいことにはこの作品には泪、涙の二字が共に見えない。』——これは、どの本によつた結果なのであらうか。書名からしても「盛衰記」に「ナミダ」のないのは、常識的に考えてもおかしからう（これを以て珍しい、と斷じておるのである

う）まして實際にあるのに見えない、といわれているのは一層おかしいではないか。實例を示してみよう。「好色盛衰記。卷四、煙に替る姿大臣」の説話（「古典文庫本、一六〇頁、一行目」）に「太夫さまのお身のため仰せられしに是を聞下く、泣泪に庭は草履はかれず……」とあり、更に一番最後（「古典文庫本、二二七頁、四行目」）にも「……女郎も誠の泪袖にあまりて其夜道頓堀の野墓の煙となし……」とあるではないか。まさに「泪」で、この説話は終つていゝのである。——この一事をしても、餘りに速斷といへはしまいか。このようにして氣付いたことを「論文」の實例にあたつて示していゝて見よう。（冒頭の漢數字は「論文」のそれを示す。※印は私註・私見を示す）

『一、「なみだ」——（前略）涙の字のみを用ひるもの（永、（下略）』

※さて「泪」は「永代藏」にもある。「世はぬき取の觀音の眼」（卷三）に「扱もいそかしき内證しばし見るさへ身に應て泪出しにV（中央公論版、八四頁、四行）なお異版（江戸版）にはハしばしみるさへ身にきへて泪出しにVとある。當時（前時代も）一般には「泪」の字がよく見られる。西鶴だけではない（第一部を参照）これはおしなべて異體字の研究に屬するが漢字に濁點をふるのと共に、相當に古い傳統を負つていゝと考へてよい。（なお訓讀法の一因として、後世のものは佛典、佛教因緣説話などに於けるヨミ方からも影響をうけていゝと思う。従がつて「近古」の國語から調べるべきであらう。）

『八、「或——」（前略）「私註甲作品をのぞいて」「有」の字もて

「或」に代用せり。」

※「好色二代男」「新可笑記」にも見える字である。(實例文、略す)

『一三、「かたち」○甲—貌(中略)○乙—形(永を除く七作品)』
※「貌」は「好色一代女」にもあつて「二代男」のみの獨占ではない。(第一部を参照)

『一六、「ささやく」○甲—「私語」○乙—「小語」』

※「私語」は「日本永代藏」にあり、反面「小語」は「好色一代男」「好色一代女」などにもある。(第一部を参照する)

『一七、「淨瑠璃」○甲—「淨瑠璃」(中略)「淨瑠璃」とせるはなし』

※他にないといわれるが「二代男」「枕久一世物語」(もつとも、これは論外であらうが)にもある。

『一八、「せんぎ」○甲—「衾義」』

※右で甲というところ「織留」がふくまれていないことになるが「織留」にも見えるし他作家の作品にも見える。又、「下學集」でも語彙の解説文中に見える。

『一九、「禮那」○甲—「且那」○乙—「禮那」(傳、永、新)

※「且那」は「武道傳來記」「好色二代男」「好色一代女」その他にもある。

『二二、「のど」○甲—「喉」(のど)○乙—「咽」(のんど)すべて「のんど」と振假字せることに注意すべし。』

※右の説明は間違っている。「咽」を「のど」と振假字してあるのは「日本永代藏」にもあるし「俗つれづれ」にもある。又、當

時の他作家のものにも見える。第一部を参照のこと。

『二四、「ひそかに」○甲—「偷に」(中略)○乙—「竊に」「密に」とありて「偷に」とせるはなし。』

※第一部を参照のこと。「好色一代女」にもある。やはり、一般的用法であらう。外に、「易林本」には見えない「潛に」(潛に)「男色大鑑」が見える。

『二六、「ふと」○甲—「与風」○乙—「不圖」(傳)「風斗」(義)「風与」(義)。外に用ひたるもの見當らず。』

※「好色一代男」には「論文」の言うような「与風」はない。「與風」とある。これは第一部でも「与風」とあるので、當時の通用として「與風」とある可能性が強い。「風」が「フ」と讀まれることは「風流」などでもあるし「与・與」が「ト」と讀まれるのは漢文訓讀などでは普通である。よつて「風與」とあるのは肯づかれる。更に私は證左として、江戸幕府の刑法にある「犯罪の記載法」に見える用例をあげておこう。即ち「巧」を以て犯した罪に對し、當座の出來心で犯した罪を「不斗(或は與風)犯した罪」と「與風」の字で書かれたようである。してみると「與風」も當時として誰にも分つた通用的文字ということになる。これは一私見である。又これは、「一代男」の外にも「一代女」などに見える。(第一部を参照のこと)

『二七、「まこと」○甲—「誠」○乙—(前略)用ひざま區々たり。』

※「論文」は「一代男」が「誠」で一貫性ある表現をとつていているというのであらう。しかし「一代男」に「俄」とあるのはどうで

あろうか。むしろこの様な字例こそ宛明さるべき大切な點ではなからうか。

『二八、「もとで」○甲—(一代男にはなし)「望姓」(難)○乙—「元手」(不、永、俗)「質」(織)』

案すでに第一部で了解すむと思う。「望姓」は、「織留」(日本永代藏)に見えること衆知の通りである。どうしてわざわざ「元手」などをもつて來たのであろうか。「一代男」にないのは、内容の當然のあり方であらう。なお、「難」では「望性」とある。

以上氣の付いた點を示してみた。上でも述べたように特殊と一般を混同してはいけない。「論文」はこの點二つの大きな誤謬を犯してはいまいか。(1)用例の不正確 (2)それに立つての推論の誤用、しかも西鶴と非西鶴を區分するという重大な仕事をも結論づけているのである。もし、私達が西鶴の用字を問題にするならば一般的な基本的な見通しをもつて後といえよう。「一代男」の「不思議、或」などの一貫性は筆者西鶴の教養程度の高さを示すのかも知れない。むしろ、この様な現象は珍しいといえる。「咽」が「のんど」とよませるのが傳統的であると共に「群衆、焼亡」などなど共にはなはだ傳統的といえる。むしろ、そういう一つの傳統から脱していないのに驚く程である。「西鶴諸國はなし」を自筆板下とすれば「淨溜利」「不思議」「不思議」「子細」など「石車」でいう彼の氣概も疑がいたくなる程である。しかし彼のいう通り「世間にしれた言葉」なのであろう。さて再度論文の論を考えて見る。もし「一代男」と「難波」が同類として一體と考えるべきならば「さかやき」が「月代」「一代男」「厭」

(「一代男」「難波」とあるのはどう説明されるのであろうか。「厭」は、ほかに「西鶴諸國はなし」「俗つれづれ」にも見える。又、相反する作品群にも一致して見える字例——「只」「(一)樹久一世。二世。一代女、一代男、永代藏、五人女、新可笑」——は如何に説明されるのだろうか。「煙」も「一代女・織留・永代藏・一代男」と混在している。このような混在状態は、他の多くの語にも見えるところである。

もち論一般的なものの中に西鶴という特殊なものを浮彫させるのが次に考えられ、且つなすべき作業であらう。そして當時の他作家の作品と對比して、特に西鶴的なものとして取出せる語もあろう。又、同じ西鶴の作品でも、これにあつて、かれないという——一種の用字の分布圖——現象も見られる。これらすべてを含めて、更に一層研究はおし進められねばならない。

以上甚だ粗雑な論考になつてしまつたが、森先生の再度の御教示を得られればと思つている。竊、「用字法研究」にあつては自筆板下本によるべきと思う。次の機會にこれについて、私見を述べてみたい。

註1 山田孝雄先生の「國語の中に於ける漢語の研究」(五二

一八)を参照。

2 テーヌの「シエクスピア論、バルザック論」を参照。ことに「文體」の項は私をして強くこの方面(言語と文學)に引きつけた。バルザックはフランス語の何ものかを理解するのに七年間を費したという。

3 「俳諧石車」の中「をとをなひの文字の事」の項を見よ。

參考となるので以下引用しておく、「(前略)○をとまひといふ正字は是なりと何逆文字類はして見せざるや」とて

は文盲無筆成男か坊主か批判者の只か見たし(中略)寛角をとまひといふ正字を急度出さへし假名書にいたし置ての汝か言分者也○案内○音内は世間にしれたる言葉なりは見るへし△連歌につかふをとまひ○音ひ此外になし△定

家の假つかひには 音信ヲトナヒ △神代の巻の内に見る

○喧嘩ヲトナヒ △東福寺虎關雪隠の額 ○音内是ヲトナヒ

○此外字彙三萬七千一百七十五文字をさかして音ひは是也(中略)是程廣ひ世界にもない物はなし(後略)(傍點筆者)——例によつて西鶴口調でまくしたてている。

4 用語については別に述べるつもりだが「なりあひにハナリヌメニマカセテ」V「氣の毒ハ自分ニツイテイウ」V「終にハツイゾ……ナイ」など狂言にさかのぼつて考えられる。彼の用語の系譜も興味ある問題である。

5 以下使用した辭書について刊記をしるす。

(イ)易林本節用集…慶長二年板?

(ロ)下學集…元和三年板…岩波文庫本による

(ハ)倭玉篇…寛永五年板…日本古典全集本とことなる。増補本である。

(ニ)贅頭節用集…貞享五年

(ホ)玉篇大全…元祿四年

(ヘ)増補合類節用集…元祿十一年(はじめは延寶八年刊)

(ト)節用文字

6 「三國傳記」(沙彌玄棟撰應永年間)に「施陀羅石流岩木ナラネハ目暮し心消テ泪落セリ」(卷三)とある。

7 堪輿鈔(文安年間…正保三年開板)の卷三の四十一物ノサハヤカナト云ハ何レノ字ソの條に「爽ヲ書ク。太平記ニモ。是ヲ用字註ニモ明也。(中略)如此ノ詞ノ字凡多カルヘシ。漢書三志古記文選ヨリ乃至遊仙篇千字文文集等ヨリ出タリ。此等ヲ訓ノ讀ノ本書トスル歟」とあり、以下五百語程訓讀例をあげている。

8 古刻の「節用集」にも一、天正本(堺版)二、易林本三、饅頭屋本、と三種に分れる。一般に、室町時代に最も廣く行われたものとして、それぞれ別途の性格(目的)をもつ辭書「節用集。倭玉篇。下學集。聚分韻略」がある。西鶴の場合もこの四種にあたつて考えて見るべきであろう。

9 「睨太鞍草臥」など前期「假名草子」などから後期の「咄本」などにも見える。「土圭」(「一代男」)は「毛吹草」にも見える。「時計」は宛字。「土圭」が正しい用法。

10 當時の訴訟文、家訓文書類の通用文字體も參考にすべきであろう。

追補(1)本来なら楷書と行書とも別に考えねばならぬかも知れない。「邊」の行書は「邊」なっている。これは楷書で「邊」とする必要がないのかも知れない。又、「臂」も「臂」と楷行兩書で異なっている。又後期(寶永二年)であるが、「殿」・「様」のくずし方によつてそれぞれ四つから五つに上下の差を區別するように注意してある。(字盡重寶記)

猶「第一部」の用字例の出典名は重複する時もあるが、いずれか一方の名にとどめた。

追補(2)「徳川禁令考後纂」の「刑律條例之部」、「赦律」の條から用例を次に抜萃しておく。

「○當座御蔽之事(前文省略)右飢渴又ハ貧窮ニ迫リ其外與レ風之出來心にて盜いたし候類……(後略)」もう一例は「○御法度を背候類 右與レ風之心得違ニ而巧成儀も無之強而人之害ニも一分相成類ハ赦免可由付事」とある。「吉川弘文館本による。同書四九五・六へ」

「三田浄久の手紙」の中にも見える。

「○(前略)與風御出候事かならず御無用に存候。(行風宛)」「○我等も與風御參緩こと可申承候恐惶謹言。(正信より)」

追補(3)なお「節用集」も系統の異なるに従つて多少、單語の異同がみられる。「鵜飼」(鵜・鵜)「共」(共に、「一代男」)「養齒」(二十不孝)などは「伊勢本の節用集」に見える。又この拙論を、すこし發展させた私見として(殊に、西鶴の作品内の用字法)近世文學會十月三十日で、研究發表を行なつた。二部の拙論での手薄なところはそこで補なつたつもりである。

(4)浪人と罕(罕)人の一般的な語史を記しておく。○浪人…郷土をはなれて他郷を浮浪する百姓の總稱。浮浪人の略。「類聚三代格」(AD9)に見えるし、そうとう古くから見える語。平安—鎌倉—江戸初期まで「罕人」と意味上

も區別された。もつとも浪人という語、自身が、嚴密には、二つに分けられる。なお、はじめは、「ウカレヒト」と訓じたいらしい。○罕人…主家を去つて、祿を失つた武士。

初見は「看聞御記」(永享五年・1433)といわれる。(源平盛衰記にも見えるようだ)。江戸初期(從來は、中期とされているが、私のしらべた限り、初期とした方がよさそうである)まで、ほぼこの用法があつた。土一揆の記事などによく見える。芭蕉、近松も罕人である。なお、從來いわれていないが「勢人」(伊勢本節用集)の文字も見える。

「浪人」と「罕人」が、同じように用いられたのは、いわゆる訓詁學派などが起つてからである。貝原好古などは、「音が同じ」であるから、共に、兼用してよいという見方をしている。これなどはあやまりである。その他、二、三、コツケイな解釋もある。

追補(4)漢字と和訓の問題については日本コトバの會機關紙「日本のコトバ」に「日本人は、どのように漢字を用いたか。」という題目で、歴史的考察をくわえておいた。参照を願う。

追補(5)「森先生の論文」とは、……。「西鶴研究」(第六集)(古典文庫刊)に、のせた論文。「好色一代男」を正とし各作品内の、用字(漢字)の異同を考察し、作品の眞偽を判別、批判したもの。